

保育現場と連携した運動あそびの実践報告
—学生のコミュニケーション能力向上に視点をあてて—

長谷川 香・上山七々子・巴 夏樹

Practical Report on Exercise-play in Corporation with Nursery Schools
: The Viewpoint of Developing Communication Skills of Students
for Nursery School Teachers

Koh Hasegawa, Nanako Kamiyama, Natsuki Tomoe

豊岡短期大学 論集

第 15 号 別冊

平成 31 年 3 月 31 日 発行

保育現場と連携した運動あそびの実践報告

— 学生のコミュニケーション能力向上に視点をあてて —

Practical Report on Exercise-play in Corporation with Nursery Schools : The Viewpoint of Developing Communication Skills of Students for Nursery School Teachers

長谷川 香 上山 セツ子 巴 夏樹

Koh Hasegawa, Nanako Kamiyama, Natsuki Tomoe

はじめに

保育を取り巻く社会情勢の変化、保育所保育指針の改定を踏まえ、平成29年12月の保育士養成課程検討会において、より実践力のある保育士の養成に向けた保育士養成課程等の見直しについて検討が行われた。従来より、保育士養成過程では、保育に関する幅広い知識は講義などを通じて学び、その知識を生かした実践力の育成などの応用的な部分は保育実習で学ぶようになっている。しかし、保育実習は、現場での学びとして、学校では学ぶことのできない子どもとの関わりや、実際の子どもの発達・育ちなどに触れる貴重な機会ではあるものの、限られた短い期間において、1日の生活の流れを把握することに精一杯であったり、保育者や子どもとのコミュニケーションに戸惑う学生が多く、保育者として必要な知識・技能を十分に習得することは難しい。そのため保育士養成校として、実践力を身に付け、即戦力として活躍できる質の高い保育者をどのように養成するかは重要な課題である。

今回の養成課程の見直しでは、より実践力ある保育士の養成にむけた教授内容等の見直しが行われている。では、保育者の実践力とはどのようなものだろうか。谷田貝他(2013)は、保育者の実践的能力として、①子どもを理解する力 ②保育を計画する力 ③保育を実践する力 ④保育を省察する力をあげている。本校では、上記のような実践力を養成するべく、保育園と連携した授業の取り組みを行ってきた。今回は、その取り組みの一つとして、保育園園児を対象に学生が企画運営をした運動あそび実践を取り上げる。そして、保育者としての資質向上を目指す実践授業を通し、実際に子どもと関わり、子どもの動きを観察するといった体験をすることによる、学生のコミュニケーション能力等の人と関わる力の育ちについて、現状と課題を考察したい。

1. 保育士養成校学生の現状

幼稚園教育要領には、保育所保育指針および幼保連携型認定こども園教育・保育要領と共通の内容で、領域「人間関係」の目標として、「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う」とある¹⁾。本来であれば、遊び等を通して、幼児期に育つことが望まれる基礎的力であるが、最近の学生は、全般的に子どもの頃から遊びの経験が不足しており、実習指導等での学生の現状を見ても、指導計画立案時に遊びにおける援助や配慮、留意点を検討する際に必要なイメージを持っていない傾向がある。これらは、学生に遊びの経験が少なく、保育における様々な活動のイメージが持ってないことに原因が考えられる。また、実際の現場実習では、子どもと遊んだことが無い、どのように言葉をかけたらいいのかわからない等、子どもと関わりコミュニケーションを取る事に戸惑う学生も多く、現場の実習担当者より、一部の子どものしか関わらない、自分から話しかけられない等、積極性の無さを指摘される学生が多い。このように、実習場面においては、保育の専門知識や技術以上に、他者とのコミュニケーション能力といった資質が求められるというのが現状であり、養成校において、保育者としての専門性や実践力を育成することは、大変難しい課題でもある。

このような状況を踏まえ、本校では学生のボランティア活動を推奨している。ボランティア活動を通し、幅広い年代と関わることによる、コミュニケーション能力の育ちを期待しているためである。その中の一つに、札幌市の子育て支援係等が中心となり実施されている、様々な地域子育て支援活動がある。学生も多数ボランティアとして参加しており、学生はボランティアを通して、子どもや保護者との関わり方を学んだり、地域が子育てをどのように支えているかを理解する機会とすることができる。

2. 現場と協働した連携授業の取り組み

本校では、主体性と責任を持った実践をすることをテーマとして、体験学習をカリキュラムに取り入れている。学生の主体的参画により、学生自身が企画を立てる、準備し、実践するといった、行動計画立案の体験を通して、保育者となってから必要となるコミュニケーション能力を培うことを目的にしている。授業では、学生が子どもと関わる力や保育者間の協働の重要性を理解し実践できるようにするため、様々な場面で協調性を持ちながらも各個人がリーダーシップを発揮し主体的に活動することを重視している。さらに、グループワークを通し、お互いの意見をくみ取りながら、意見を出し合い、行事を企画運営することによる、コミュニケーション能力の向上も意図している。その中で、保育園児参加による子どもとの触れ合いができる活動では、実際に子どもと関わることで、子どもの姿が具体的にイメージでき、学校での授業内容の理解度が増す効果が期待される。また、異学年の活動では、学びの連続性が保証され、1年生は2年生の姿から、自分の今後の目標を明確にし、2年生は改めて自分の行動を振り返る機会になるなど、学生間の学びあいの場となっている。

3. 運動あそびを通じた子育て支援活動の実施内容

保育士の仕事は子どもの育ちを支えることであるが、保護者に対する子育て支援も保育士の重要な責務である。近年は、核家族化や少子化、孤立化等、様々な家庭を取り巻く問題が進行しており、育児不安感を強く抱える保護者も少なくない。子どもとの関わり方がわからないという保護者は育児不安とともに育児に対し負担も感じやすく、その負担感から虐待やネグレクトが発生しやすい。そういった不安や負担感の軽減を図るには、保育士が保護者と密に関わり、養育知識や技術の提供をしていく必要がある。子どもの成長にとって、保護者との触れ合いは不可欠であるが、家庭で過ごす時間が限られる現在、保育園では子育て支援の一環として、親子が触れ合える企画が考えられている。そこで、前述したボランティアの経験を踏まえ、将来保育者として、園児と保護者が運動あそびを通して、相互に絆を深められるような子育て支援活動を実施できるようにするため、模擬子育て支援活動の企画を試みた。

授業内での企画立案後、まず保育園で園児への運動あそびを実施し、その後、本校で子育て支援活動としての運動あそびを保育園児参加のもと実施した。

また、実施後には、学生及び保育園のクラス担任に対し、以下の質問項目への聞き取りを行った。

質問1：・子どもたちの様子

・子どもたちは楽しく参加できたか

質問2：模擬子育て支援活動実施により、自身の学びになったもの（学生のみ）

質問3：模擬子育て支援活動についての改善点

なお、対象者への倫理的配慮として、本実践報告の目的及び結果を学会等で発表することを口頭で説明した。また、写真掲載にあたっては学生や保育園園長及び、参加園児の保護者から了承を得た。さらに、担任保育士からの感想や学生から提出されたレポートについては、個人が特定されない形で取り扱う事、提出されたレポートは使用後本人に返却することを説明した。

1) 「こどもと体育」授業計画および展開

(1) ねらい

グループワークを通して、学生たちで運動あそびの企画立案を主体的に行う。

「こどもと体育」の授業では、保育園での実践に向けて、さまざまな運動あそびの実践方法や展開、環境づくり、年齢による支援、安全管理等を学び、授業内での実践を積み重ねてきた。その上でこれまでの経験を活かし、学生自身が主体となり活動することをねらいとした。

(2) 方法

・対象 A市専門学校2年生 24名

- ・場所 専門学校多目的ホール
- ・実施期間 2017年10月～11月
- ・実施時間 各回90分
- ・学生が主体となって運動あそびを企画立案する。

(3) 実施内容

実践に向けて、各種目5名ずつ5グループで分担し、練習や制作物の用意などを行った。全体リハーサルを行い、各グループとの繋ぎや、関連性を持たせ、スムーズな展開になるよう教員が指導し、学生が工夫、改善した。

2) 園児に向けての運動あそび実践

(1) ねらい

① 運動あそびのねらい

あそびのルールを理解し、運動あそびを楽しみながら、伸び伸びと体を動かす喜びを味わう。

② 実践授業のねらい

ねらいに合った運動あそびを計画し、スムーズに展開できるように、一人一人が考え、行動し、安全に行えるように配慮する。

(2) 方法

- ・対象 A市S保育園児 年長24名 ・ A市専門学校2年生 24名
- ・場所 S保育園ホール
- ・実施日 2017年10月午前中
- ・実施時間 60分程度
- ・学生が主体となって運動あそびを計画・実施する。
- ・活動の様子を録画し、それをもとに振り返り、感想や改善点をレポートにまとめ提出する。

(3) 実施内容

各種目ごとに担当のグループが内容を検討した(表1)。

表1

時間	内容	要点
5分	あいさつ ・お名前よび・おやくそく	園児の緊張をほぐし、活動への意欲を高める。

5分	導入 ・楽しい準備体操 ・1曲踊るエビカニクス	いろいろな部分を伸ばす・動かす 体を楽しく暖める。
15分	展開 道具を使わない運動 ・個別・組(2～4人)・集団	判断力・瞬発力・
15分	道具を使つての運動 ・なわ ・フープ ・ふうせん	バランス能力・操作能力・リズム能力
10分	全員でリレー ・道具なし・道具あり	協調性・空間認知
5分	表彰・まとめ	達成感・次回への意欲

学生は、園児の様子を観察し、園児の運動能力や、発達について学ぶことが出来た。また、具体的な声掛けや、園児に対する支援も実践を通して経験し、次回実践する際の課題も見出すことが出来た。

3) 子育て支援活動実践 ～園児と保護者のふれあいあそび～

(1) ねらい

① 子育て支援活動のねらい

保護者が、子どもとのふれあいを通じて、子どもの成長や気持ちに対する理解を深める。また、子どもが保護者の愛情を実感し、相互の絆を深める。

② 実践授業のねらい

ふれあいあそびを通して、保護者が子どもの成長や気持ちに対する理解を深められるように支援する。また、子どもが親の愛情を実感し、親子の絆が深まるように支援する。ねらいに合った運動あそびを計画し、スムーズに展開できるように、一人一人が考え、行動し、適切な言葉かけにより、安全に行えるように配慮する。

(2) 方法

- ・対象 A市K保育園児21名 ・ A市専門学校1年生31名 ・ 2年生24名
- ・場所 専門学校多目的ホール
- ・実施日 2017年11月
- ・1年生を保護者に見立て、園児とペアになり、ふれあいあそびを実施する。
- ・2年生が主体となり実施、計画立案・当日の進行を行う。

- ・活動の様子を録画し、それをもとに振り返り、感想や改善点をレポートにまとめ提出する。

(3) 実施内容

種目に統一性を持たせるため、全体を通してのテーマを「海賊の冒険」とし、各種目で担当を決め、グループ毎に計画・実践した（図1～図4、表2）。

表2

時 間	内 容	要 点
5分	あいさつ ・はじめの言葉 ・注意事項	緊張をほぐし、活動への意欲を高める。
5分	ふれあいあそび ・手あそび ・ふれあいあそび	からだを楽しく動かしながら、スキンシップを図る。
15分	サーキットあそび 海賊冒険コースをクリアしよう！	子どもの成長が見られるコースで保護者と園児が協力して楽しむ。
15分	親子リレー	保護者が子どもを運び、目的を達成する。
10分	みんなで踊ろう！	息を合わせて踊り、スキンシップを図る。
5分	まとめ	活動に対する満足感や達成感が得られるようにする。

企画、進行を行った2年生は、大人数を動かす際の指示や、言葉かけの難しさに課題を感じていたが、楽しく活動する子どもたちの様子を間近で見ることができ、今後の活動に対する自信につながった。

園児と保護者役の1年生は初対面だった為、初めは緊張した様子だったが、活動を通して徐々に打ち解け、最後には園児が学生に甘える様子も見られた。保護者役の学生の感想にも「スキンシップをとったり、目的に向かって一緒に頑張ることで、徐々に絆が生まれた。」などの声が多く聞かれ、本実践が子どもとコミュニケーションを取る貴重な機会となり、良い経験ができていくことがうかがえた。



図1 ふれあいあそびの様子



図2 サーキットあそびの様子



図3 親子リレーの様子



図4 「みんなで踊ろう！」の様子

4. 結果と考察

保育園のクラス担任への聞き取りにより、「子どもたちが次第に打ち解けていく様子がみられた」「おとなしい子ども積極的に参加していた」との回答が得られた。さらに、保育者としての学生の立ち位置、説明を聞く時の子どもたちの座る位置や並ばせ方、子どもの様子を踏まえた関わり方等について、学生自身では気づけなかった改善点もあげられた。また、学生の振り返りレポートによると、1年生からは「子どもたちと手をつないだり、言葉を交わすことで、心の距離が縮まるのを感じた」「緊張しているからこそ、自分から積極的に話かけることが大切だと思った。」との感想があり、2年生からは「子どもの姿だけではなく、保護者の様子も想像しながらの企画は、今までと違った視点で考えることができた。」「親が子どもの成長や、感性に気づけるような活動内容が必要だと思った。」「保護者に対しての理解をもっと持とうと思った。」などの感想が得られた。

また、実施に至るまでの過程で、グループ内での話し合いや、制作作業、リハーサル練習等を通して、協働することの大切さや、時間までに作業を行う計画性も学ぶことができた。

このように、学生への聞き取りの結果、運動あそびの実践および模擬子育て支援活動の実践は、学生にとって、子どもとコミュニケーションを取る機会になったことはもちろん、企画立案における学生間のやり取りを通して、他者と協働する機会とすることができ、それによって、コミュニケーション能力といった資質向上において、ある一定の効果が期待できる授業とすることができたといえるだろう。

5. まとめ

今回の実践では、実際に子どもたちを対象として、模擬子育て支援活動の実践を行った。日頃、講義で理論を学ぶだけでは現場体験の少ない学生には現実的な実感を得ることは難しいと言える。しか

し、講義と並行して継続的に保育実践に触れることは、理論と体験との相互作用を生むだけでなく、学生にとっては、学習意欲向上につながるという事が言えるだろう。また、学生たちは、実際の子どもの触れ合いや、学生同士の協働、異学年での関わりから、日頃の学校生活だけでは得られない経験をすることができたようだ。以上のように、本実践事例では、模擬子育て支援活動の実施をもとに、学生のコミュニケーション能力といった人と関わる力の育ちについて、また、実践を通して子ども理解を深めていく過程を見ることができた。養成校として、この結果を今後の授業に反映し、より実践力ある学生を養成するため、保育現場との連携はもちろん、科目間連携も含めた授業展開を検討する必要があると言えるだろう。

秋田（2013）は、保育の質を実践の場において考える場合には、園において実際にどのようにやりとりをおこなっているか、そのやりとりを支える保育者の専門性としての園での実践的知識や行動方略を同定し解明していくことが、保育者の養成や現職教育のあり方を考えていくためにも必要であるとしている。また、高橋（2017）は、保育者の専門性を高めるための学びとして、①保育者になるまでの学び（養成校内での学び、実習を通じた学び）と②保育者になってからの学びをあげ、保育者は学び続ける存在であるとしている。このように、保育者の専門性は、養成校を卒業した時に完成されるものではなく、常に学ぶ姿勢を大切に、継続した学びによって日々つくられ向上していくものである。今回の保育士養成課程等の見直しにおいて、保育者として一層の実践力が求められる中、今後は、今まで以上により現場と連携・協働し、実践的な授業を展開することにより、保育の質向上に結び付けられるような保育実践力の育成のための工夫を検討していきたい。

引用文献

- 1) 文部科学省. (2018). 幼稚園教育要領.

参考文献

- 林邦雄・谷田貝公昭 監修 谷田貝公昭・高橋弥生編著. (2013). *新版 保育者論* (pp.126-136). 一藝社.
- 厚生労働省. (2018). 保育所保育指針.
- 内閣府. (2018). 幼保連携型認定こども園教育・保育要領.
- 秋田喜代美. (2013). 葛藤場面からみる保育者の専門性の探究(吉久知延). *野間教育研究所紀要*, 52, 1, 10-20.
- 高橋貴志. (2017). *これからの保育者論 日々の実践に宿る専門性*(pp.137-150). 萌文書林.
- 小林育子. (2018). *演習 保育相談支援*. 萌文書林.

謝辞

本稿執筆にあたり、保育園園長先生はじめ、主任先生ほか保育園の担任の先生方、模擬子育て支援活動参加クラスの園児の皆さんには多くのご協力をいただきました。心よりお礼申し上げます。